

子どもの心に寄り添える先生を目指して

「漢字が分からないから、黒板に書いてくれる？」

転校初日、緊張していた私に先生は名前と転校前の学校名を漢字で書くようにおっしゃいました。小学校低学年から書道をしていた私は、自信を持って堂々と大きな文字で書いたのを覚えています。すると先生は「わぁ、字が上手だね！みんな拍手！」と言ってくれました。今考えると、先生は決して漢字が分からなかったわけではなく、クラスみんなの前で私を認める場を作ってくれたのだと思います。

小学校5年生の春、父の仕事の都合で転校を経験しました。高学年での転校で、「友だちができるかな。うまく馴染めるかな。」と不安でいっぱいでした。そんな私に担任のR先生はとても温かく接してくださいました。

転校してしばらく経った頃、妹が転入先の学校になかなか慣れず朝泣いていました。「私も母に甘えたい。」、張り詰めていた気持ちがあふれ、私も泣いて登校したという出来事がありました。泣きながら登校した私に、先生は「友佳さんもお母さんに甘えたかったんだよね。こらえてたんだね。いっぱい泣いていいんだよ。」と言って寄り添ってくれました。この出来事を通して、先生は私を見てくれているんだと感じ、先生のいる教室が安心できる場所になりました。

「子どもと関わる仕事をしたい」と思い始めた私は、現在養護教諭として働いています。R先生のように子ども一人一人を認め、心の声に耳を傾けることができているのかと自分に問いかけ、まだまだ力不足を感じることが多い毎日です。子どもたちの心に寄り添い、一緒に笑ったり泣いたりできるようなそんな養護教諭を目指してこれからも頑張っていきたいと考えています。

小林 友佳
(一般)